

## 奴国の王墓と「漢委奴国王」金印



### I はじめに

最近の金印真贋論争

### II 奴国誕生

(1) 奴国の遺跡群 国邑と邑落

(2) 奴国王墓

### III 金印発見の経緯

天明 4 年 (1784) 「志賀島村百姓甚兵衛金印掘出候付口上書」

天明年間 (1781~1788) 井原鏈溝遺跡発見

文政 5 年 (1822) 三雲南小路遺跡発見

### IV 金印の出土地点

亀井南冥, 1784 『金印弁』 絵図

『筑前国続風土記附録』 絵図

中山平次郎, 1914 「漢委奴国王印の出所は奴国王の墳墓に非らざるべし」

『考古学雑誌』 第 5 卷第 2 号

森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気, 1960 「福岡県志賀島の弥生遺跡」

『考古学雑誌』 第 46 卷第 2 号

九州大学文学部考古学研究室, 1975 『志賀島一「漢委奴国王」金印と志賀

島の考古学的研究』 福岡市・金印遺跡調査団

### V 金印出土地の構造と性格

亀井南冥一金印遺棄説

伴信友・中山平次郎ほか一隠匿説

西谷正一埋納遺構説

三宅米吉・那珂通世・菅政友・笠井新也・榎本杜人ほか一墳墓説

塩屋勝利一石棺墓説

大森志郎一金印隔離説

### VI 「漢委奴国王」金印をめぐって

亀井南冥, 1784 『金印弁』

三宅米吉, 1892 「漢委奴国王印考」 『史学雑誌』 第 3 卷第 37 号

### VII 奴国と金印

岡崎敬, 1968 「漢委奴国王」金印の測定 『史淵』 第 100 輯

### VIII おわりに

今後の課題

### 【お知らせ】

次回の館長講座は 6 月 3 日(日)13:30~(2 時間程度) 講義室にて開催いたします。

倭在韓東南大海中依山島爲居凡百餘國自武帝滅朝鮮使驛通於漢者三十許國國皆稱王世世傳統其大倭王居邪馬臺國案今名邪摩惟昔之說也

『後漢書』倭伝

倭は韓の東南大海の中にあり、山島によつて居をなしている。およそ百余国ある。武帝(前漢第七代、前一四〇―前八七在位)が朝鮮を滅ぼしてから、使訳(使者と通訳)の漢に通じるものは三十ばかりの国である。

国は、みな王を称し、世々、統を伝える。その大倭王は邪馬台国におる。

建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升等獻生口百六十人願請見

建武中元二年(光武帝、五七)、倭の奴国が貢を奉じて朝賀した。使人はみずから大夫と称した。倭国の極南界である。光武帝(後漢第一代、二五―五七在位)は印綬(金印紫綬、志賀島発見の金印「漢委奴国王」であろう)を賜うた。

安帝(後漢第六代、一〇七―一二五在位)の永初元年(一〇七)、倭の国王帥升(帥升、倭面土ヤマト説、九州イト説、委面説など)らが、生口百六十人を献じ、請見(面会を求め)を願うた。

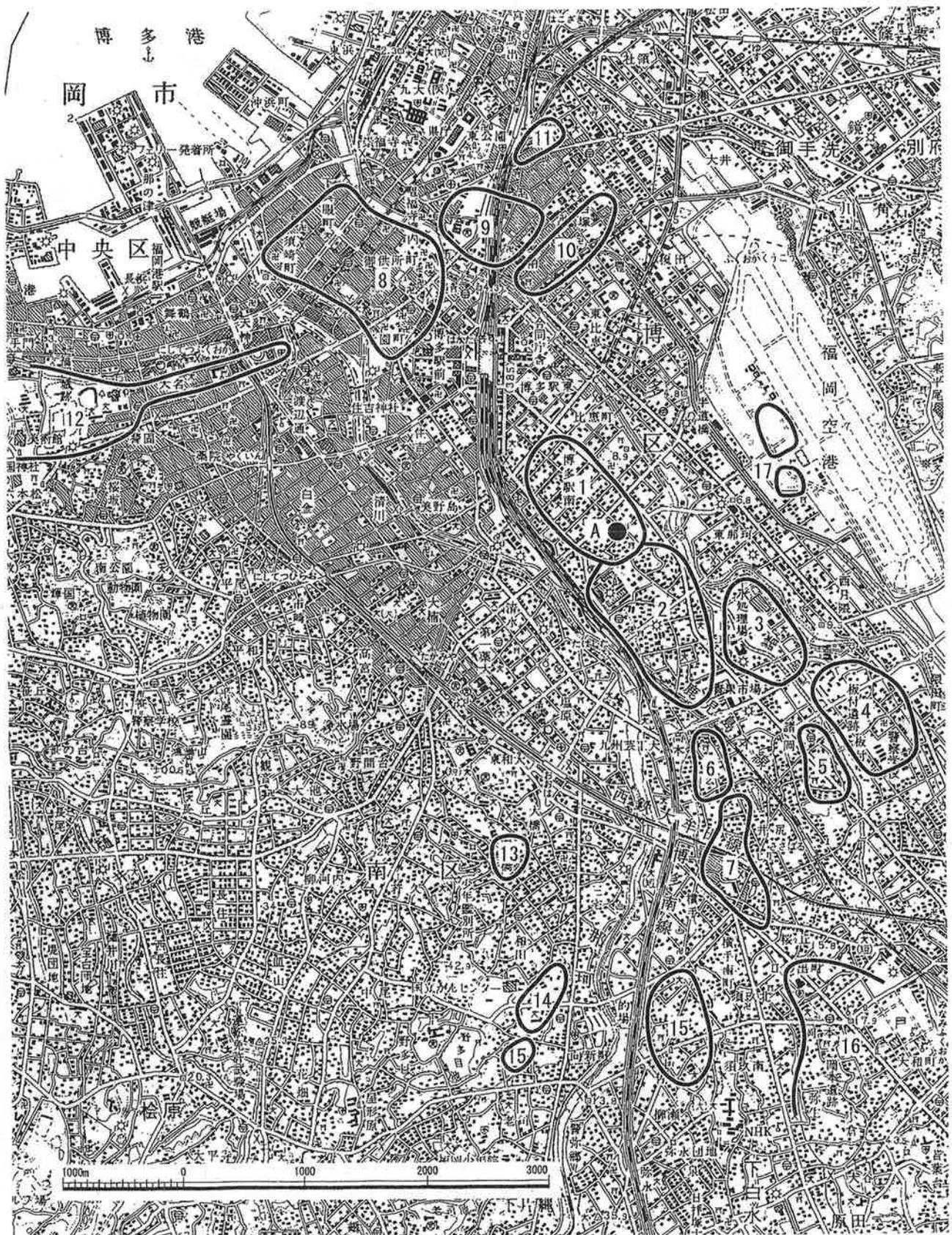
東南至奴國百里官曰兜馬觚副曰卑奴母離有二萬餘戶

東南、奴国に至るには百里。官を兜馬觚といい、副を卑奴母離という。二万余戸あり。

# 邪馬台国時代の北部九州のクニグニ



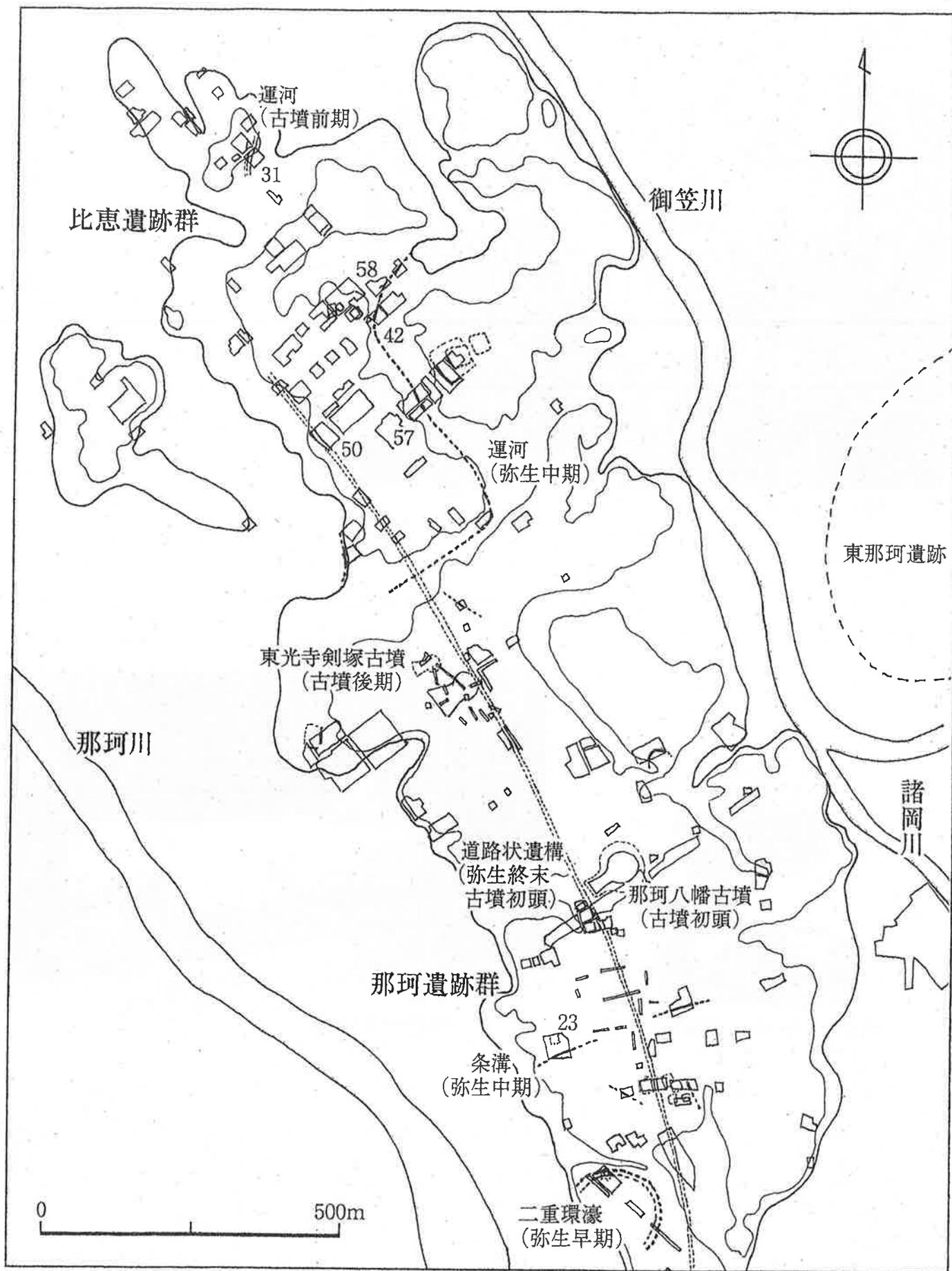
佐賀県教育委員会, 2003 『弥生時代の吉野ヶ里遺跡 — 集落の誕生から終焉まで —』



1. 比惠遺跡群 2. 那珂遺跡群 3. 那珂深才サ遺跡 4. 板付遺跡 5. 諸岡遺跡 6. 五十川高木遺跡 7. 井尻遺跡群 8. 博多遺跡群 9. 堅粕遺跡群  
 10. 吉塚遺跡群 11. 吉塚本町遺跡群 12. 福岡城 13. 三宅院寺 14. 野多目枯渡遺跡 15. 日佐遺跡群 16. 須玖遺跡群 17. 雀居遺跡  
 A. 比惠遺跡群 第82次地点

比惠遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)

福岡市教育委員会, 2004 『比惠遺跡群 37』 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』 第83乙集



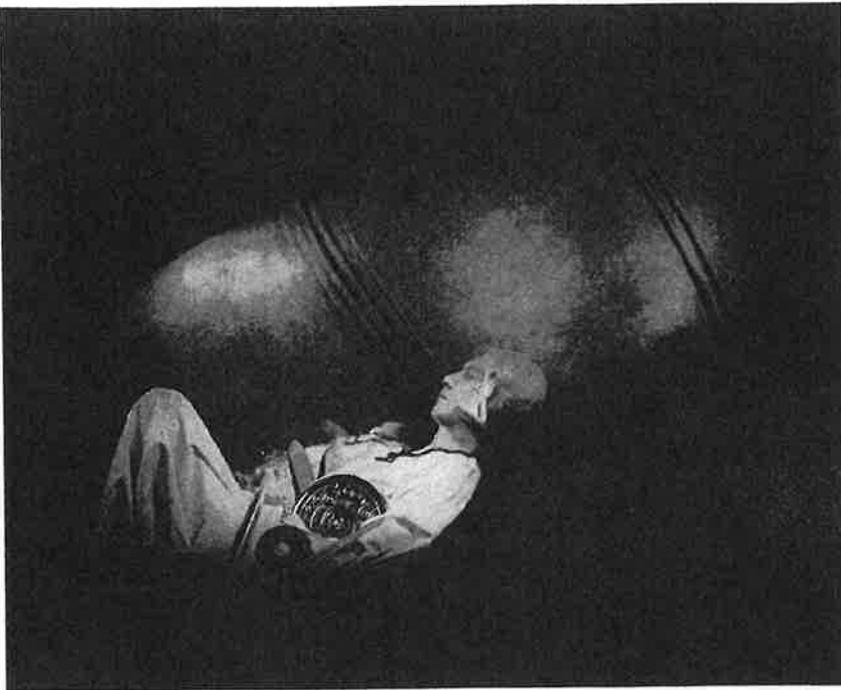
比恵・那珂遺跡群全体図

吉昭秀敏、2004「集落・居館・都市の遺跡と生活用具—九州」『考古資料大観』第10巻、小学館

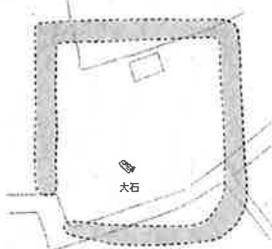
# 奴国王墓

奴国の領域は、福岡平野を流れる那珂川と御笠川流域、現在の春日市と福岡市及びその周辺部とされる。特に青銅器・ガラス製品等、当時の威信財を生産した中心地であり、伊都国と共に北部九州の弥生の国々の盟主的存在であった奴国。

奴国王墓として知られる須玖岡本遺跡、そ



須玖岡本王墓の復元(春日市教育委員会提供)



須玖岡本遺跡D地点(春日市)



須玖岡本王墓の墳丘と埋葬施設の復元図  
(福岡市博物館 2015 図版39を一部改編して転載)

伊都国歴史博物館, 2016

『王の鏡～平原王墓とその時代～』



須玖岡本遺跡D地点の大石

(京都帝国大学文学部考古学研究室 1930 図版第10より転載)

須玖岡本遺跡 D地点  
〜奴国王墓の威容〜

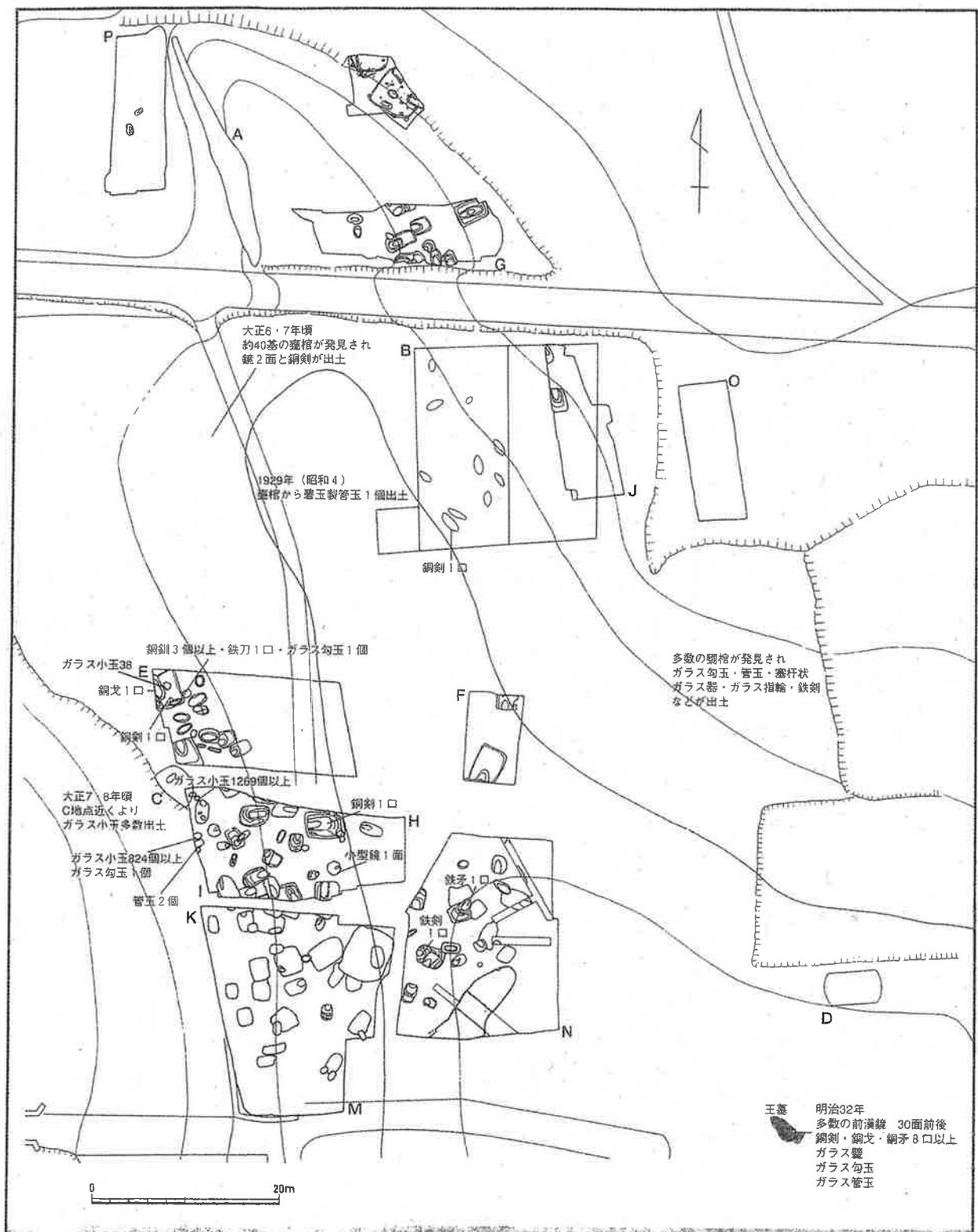
須玖岡本遺跡は、脊振山地からせり出した春日丘陵上に所在する。付近には奴国時代の集落跡や青銅器工房跡、甕棺墓などが密集し、「弥生銀座」とも称される遺跡密集地内に位置している。

明治三二(一八九九)年、住宅建設の為に大石を移動し下を掘った際に、甕棺や大量の鏡等が発見された。その後、副葬品は移設された後に散失してしまっていたが、中山博士などの手により出土品の一部が収集されている。

それらを統合すると、甕棺から草葉文鏡三面、星雲文鏡五面・連弧文照明鏡四面、連弧文清白鏡八面などの三十面近い前漢鏡が出土しており、伊都国三雲南小路遺跡に匹敵する、数十面単位での多量の銅鏡の副葬が行われている。

この中で特に注目されるのは、径二〇cmを超える三面の草葉文鏡の存在である。このような大型の草葉文鏡は中国でも出土例が稀少で、王侯クラスのみが所有する鏡であり、奴国王の絶大な権力を物語っているものといえよう。

鏡以外にも銅矛六本・銅劍二本・銅戈一本以上の青銅製武器類、ガラス璧、ガラス勾玉・管玉などが副葬され、北部九州の大國、奴国の王墓にふさわしい威容を誇っている。



須玖岡本遺跡調査地点と副葬品

- |  |                         |
|--|-------------------------|
| A～D 地点<br>京都帝国大学文学部考古学教室調査(昭和4年)               | H～K・M～P地点<br>在日市教育委員会調査 |
| E・F 地点<br>九州大学文学部考古学研究室・福岡県教育委員会調査(昭和37<br>年度) | P地点1次調査(昭和51年度)         |
| G 地点<br>福岡県教育委員会調査(昭和54年度)                     | 1地点2次調査(昭和62年度)         |
|  | 7地点3次調査(昭和62年度)         |
|  | 8地点4次調査(昭和63年度)         |
|  | M地点5次調査(平成5年度)          |
|  | N地点7次調査(平成2年度)          |
|  | O地点8次調査(平成3年度)          |
|  | P地点9次調査(平成9年度)          |

福岡・須玖岡本遺跡(「ナ国」王墓とその周辺)春日市奴国の丘歴史資料館作図

第19回国民文化祭福岡実行委員会, 2004『シンポジウム 邪馬台国の時代「又国!」』

志賀嶋村百姓甚兵衛

私抱田地叶の崎と申所田境之中溝水行悪敷御坐候ニ付、先月廿三日右之溝形ヲ仕直シ可申逆岸を切落シ居申候処、小キ石段々出候内式人持程之石有之、かな手子ニ而掘り除ケ申候処、石之間ニ光り候物有之ニ付、取上水ニ而す、き上見申候処、金之印判之様成物ニ而御坐候、私共見申たる儀も無御坐品ニ御坐候間、私兄喜兵衛以前奉公仕居申候福岡町家衆之方へ持参り、喜兵衛を見せ申候へハ、大切成品之由被申候ニ付、其儘直シ置候処、昨十五日庄屋殿へ、右之品早速御役所江差出候様被申付候間、則差出申上候、何レ宜様被仰付可被為下候、奉願上候、以上

津田源次郎様  
御役所  
天明四年三月十六日

津田源次郎様  
御役所

天明四年三月十六日  
津田源次郎様  
御役所

津田源次郎様  
御役所

「天明四年志賀嶋村百姓甚兵衛金印堀出候付口上書」

那珂郡志賀嶋村百姓甚兵衛申上ル口上之覚

一、私抱田地叶の崎と申所田境之中溝水行悪敷御坐候ニ付、先月廿三日右之溝形ヲ仕直シ可申逆岸を切落シ居申候処、小キ石段々出候内式人持程之石有之、かな手子ニ而掘り除ケ申候処、石之間ニ光り候物有之ニ付、取上水ニ而す、き上見申候処、金之印判之様成物ニ而御坐候、私共見申たる儀も無御坐品ニ御坐候間、私兄喜兵衛以前奉公仕居申候福岡町家衆之方へ持参り、喜兵衛を見せ申候へハ、大切成品之由被申候ニ付、其儘直シ置候処、昨十五日庄屋殿へ、右之品早速御役所江差出候様被申付候間、則差出申上候、何レ宜様被仰付可被為下候、奉願上候、以上

志賀嶋村百姓

甚兵衛印

天明四年三月十六日

津田源次郎 様

御 役 所

右甚兵衛申上候通少も相違無御坐候、右体之品堀出候ハ 不差置、速ニ可申出儀ニ御坐候処うかと奉存、市中風説も御坐候迄指出不申上候段、不念千万可申上様も無御坐、奉恐入候、何分共宜様被仰付可被為下候、奉願上候、以上

同村庄屋 武蔵印

同年同月 日 組頭吉三印

〃 勘蔵印

津田源次郎様

御 役 所

金印弁 亀井南冥自筆本

天明四年（一七八四） 福岡市美術館蔵

金印を實際に鑑定し、考証を行った最初の文献。亀井南冥の、漢籍や古印譜についての博識がうかがえる。

金印辨

筑前龜井曾道載撰



右金印蛇鈕一枚體製篆刻圖ノ如シ天明甲辰二月廿三日筑前那珂郡志賀島農民田ノ壟シ大唐ノ下ノ是ノ得ヌリ愚案スルニ

後漢書東夷傳曰倭在韓東南大海中依山島為居凡百餘國自武帝滅朝鮮使譯通於漢者三

金印



正面

横

方七分  
高三分  
鉄四箇  
重二十九文

漢委奴國王

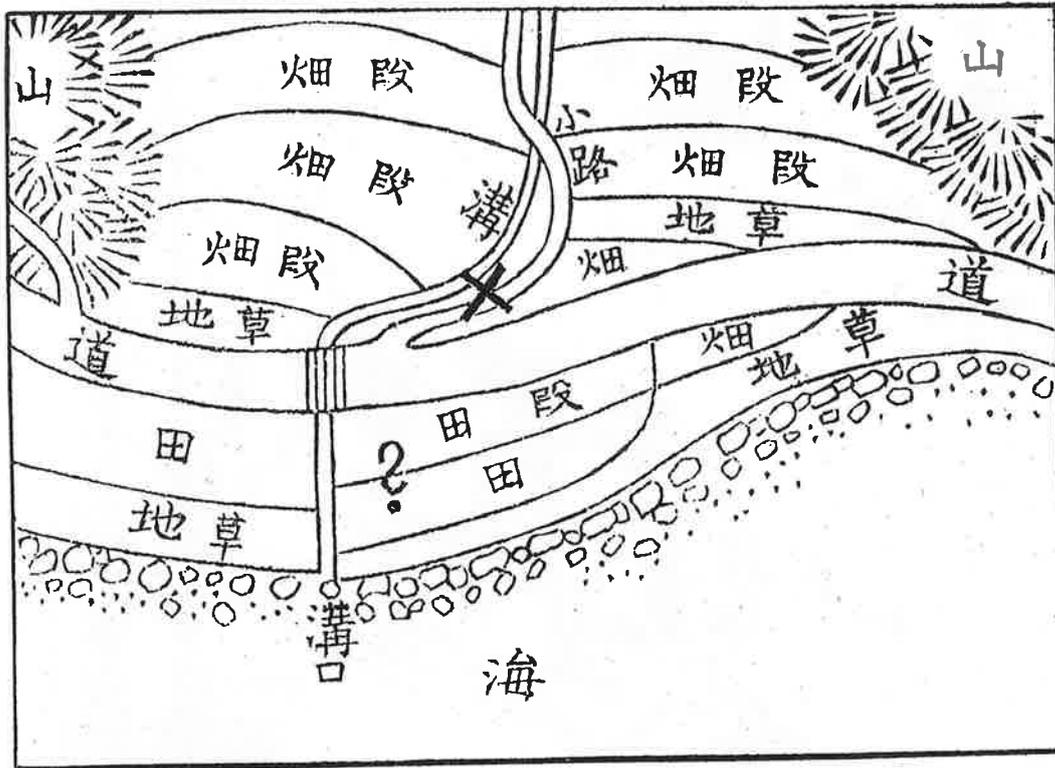
真押



金印



福岡市立歴史資料館、一九八四「漢委奴國王」金印展—金印発見二百年—特設展図録

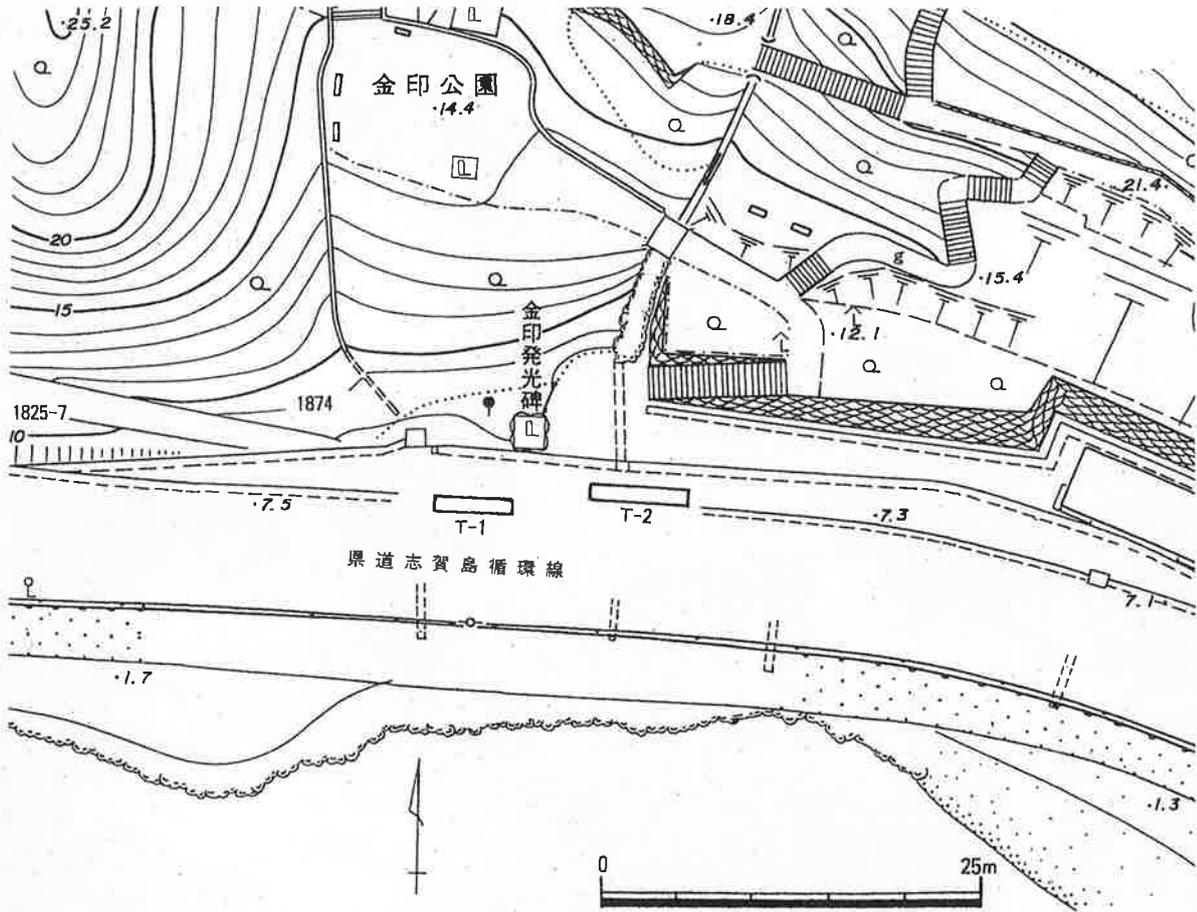


中山平次郎, 1914 「漢委奴国王印の出所は奴国王の墳墓に非らざるべし」  
『考古学雑誌』第5巻 第2号

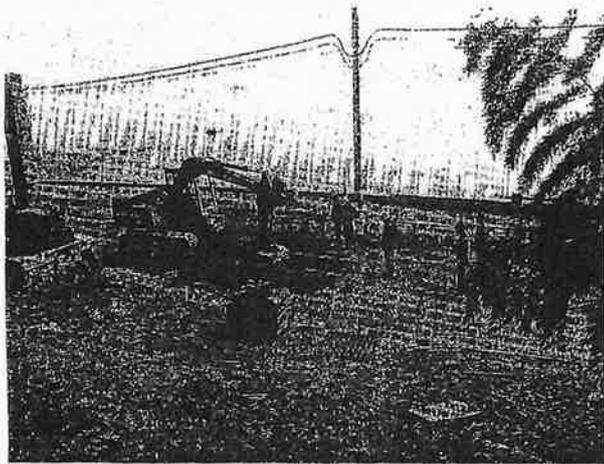


志賀島・金印出土の地

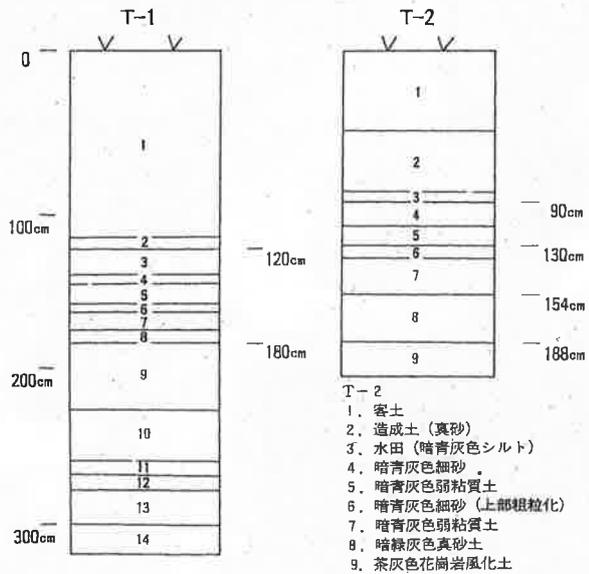
岩波書店編集部・岩波映画製作所，1951『金印の出土土地—北九州の歴史—』岩波写真文庫46



金印公園試掘トレンチ (T-1、T-2) 配置図 (1/500)



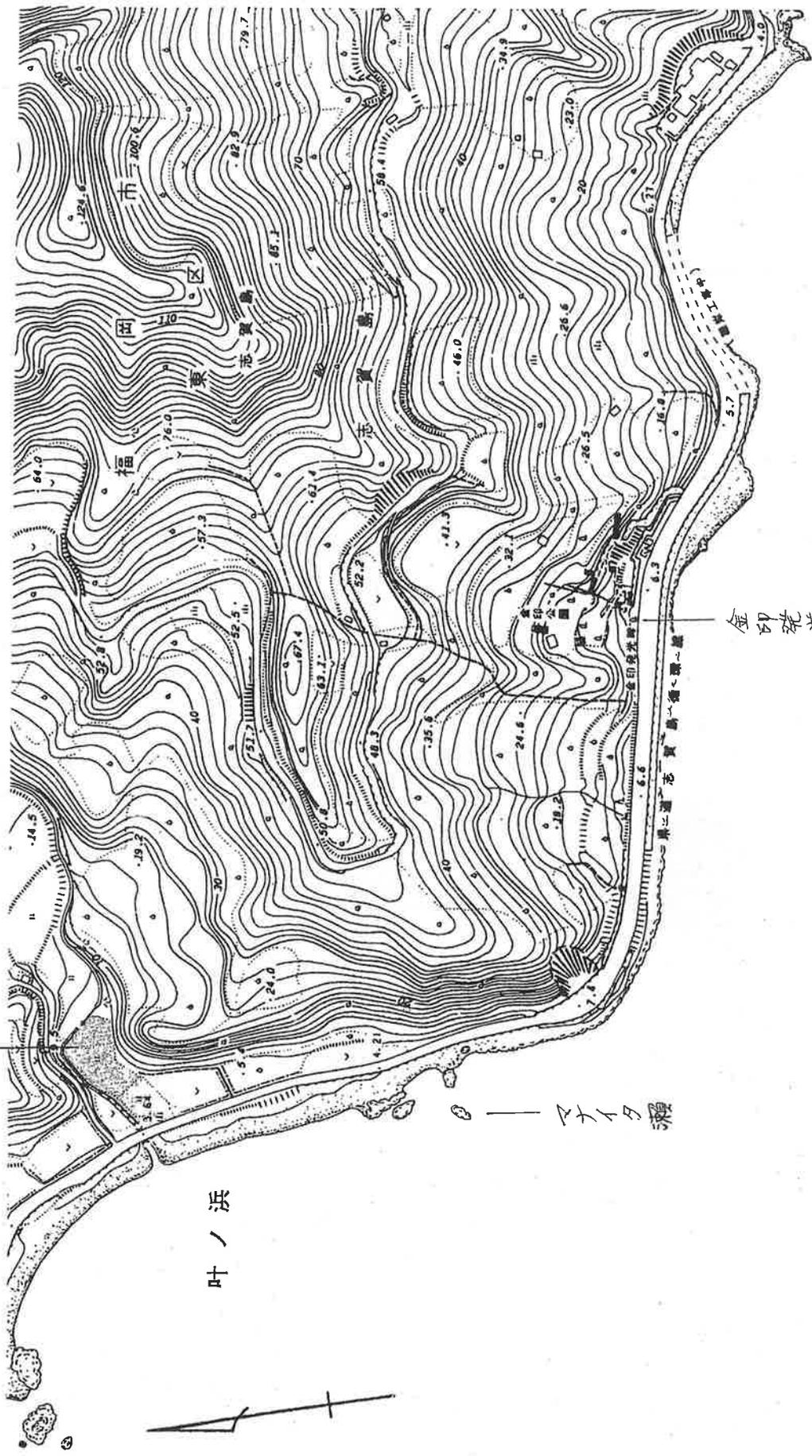
T-1トレンチ発掘作業風景 (北から)



- T-1  
 1. 客土  
 2. 水田上面  
 3. 灰褐色シルト  
 4. 灰褐色細砂 (木質を含む)  
 5. 灰褐色細砂 (粘土化、下半グライ化)  
 6. 灰白色細砂 (一部粗砂を含む)  
 7. 淡青灰色細砂  
 8. 黒色砂  
 9. 黒灰色粘質土 (上半部木片を含む)  
 10. 暗黒灰色粘質土  
 11. 暗黒灰色細砂 (粘土混る)  
 12. 暗黒灰色粘土  
 13. 粗砂  
 14. 暗黒灰色粘質土

トレンチ (T-1、T-2) 柱状土層模式図 (1/50)

調査地



博多湾



金印光處碑

マイト川

叶ノ浜

L-30区 (叶ノ浜) 調査地点位置図

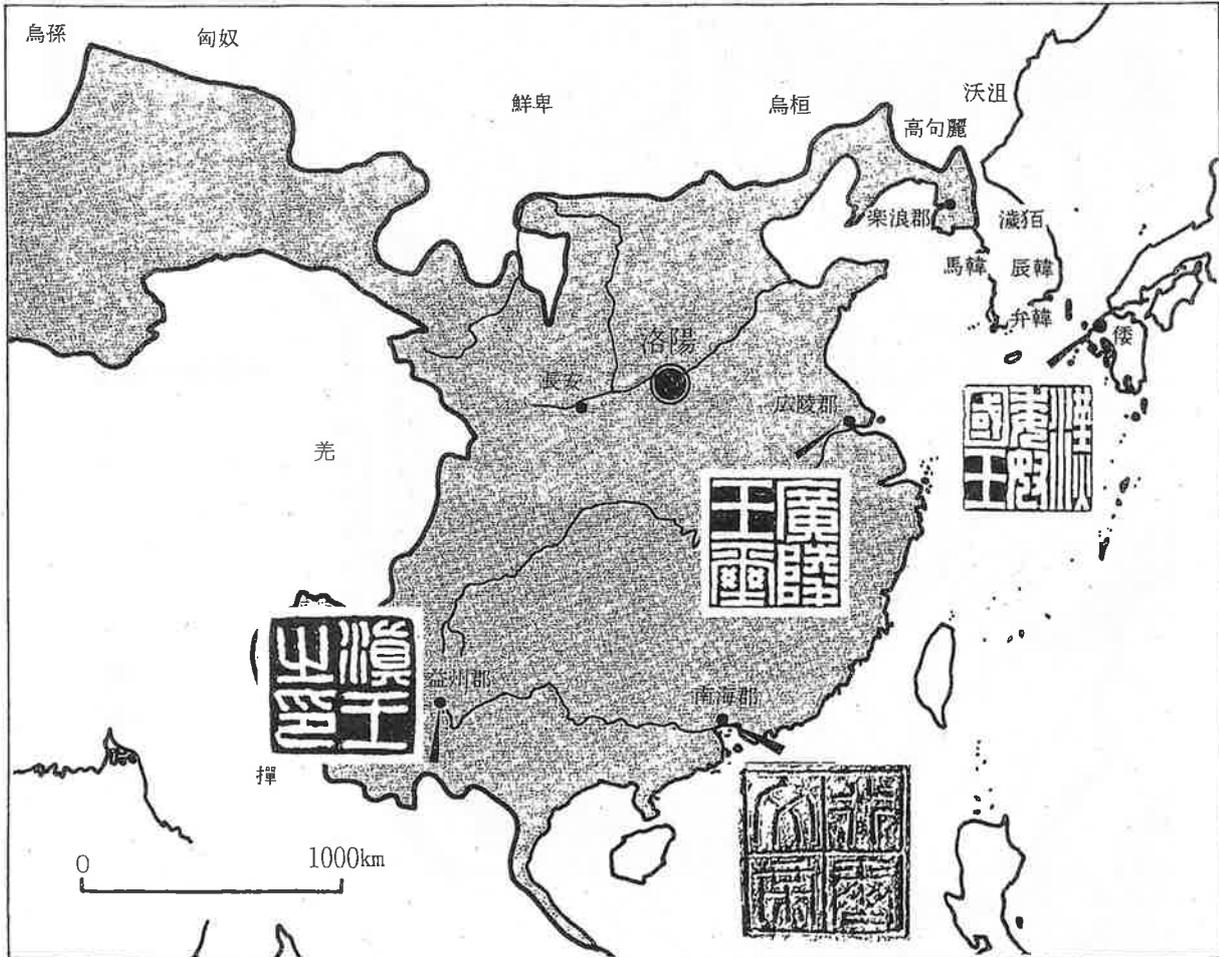
## 中国古代の印章制度

中国古代の印章制度は、戦国時代の古鉢コハツとよばれる印章に始まり、秦を経て漢代に整えられた。

漢代の官印は、皇帝以下の政治・軍事の官職によって材質、鈕の形、印文などが決められており、大きさは方一寸（約二・三cm前後）であった。官吏の任官にあたっては印綬を仮され、印鈕に綬を通してこれを佩帯した。綬は長さ一丈二尺（約二・八m）の絹紐を用い、その色も官位によって区別されていた。官吏は常に印綬を身に帯び、文書などの封泥に押印した。

三国時代にも漢の印制は受け継がれるが、紙の普及につれて、印章は封泥印から捺印へと変わってゆく。

福岡市歴史資料館、一九八四



漢の領土(紀元140年)と出土した王の金印

滇王之印 蛇鈕金印 前漢 1辺2.4cm、高さ2cm、重さ90g

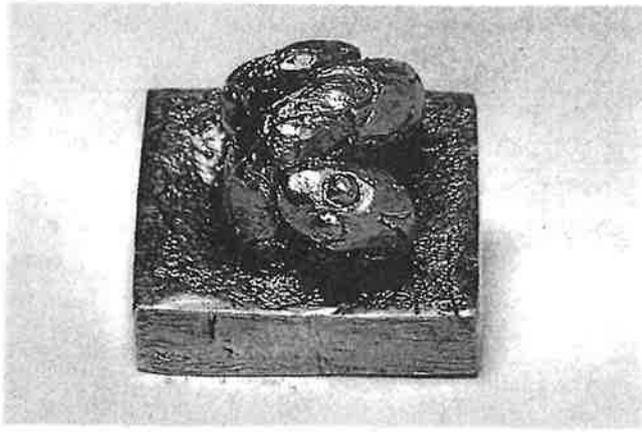
1956～60年に雲南省晋寧県の滇池東岸、石寨山サイで50基の墓が発掘された。第6号墓からは「滇王之印」と彫った方1寸の蛇鈕金印が発見された。滇はこの一帯の非中国系民族でその文化を石寨山文化（前漢初期～後漢初期）とよぶ。

前漢の武帝は紀元前109年にこの地を攻めた。

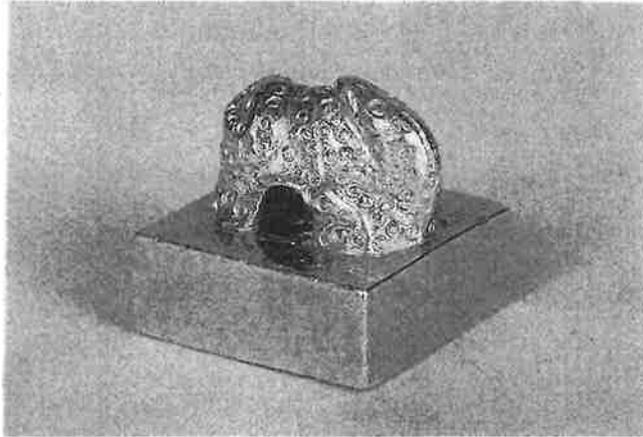
滇王は降伏し、武帝はここに益州郡をおき、滇王に王印をあたえた(『史記』西南夷列伝)。「滇王之印」は武帝があたえた印であろう。

「滇王之印」は、文献と考古学をつなぐという点で、「漢委奴國王」印と共通する資料である。

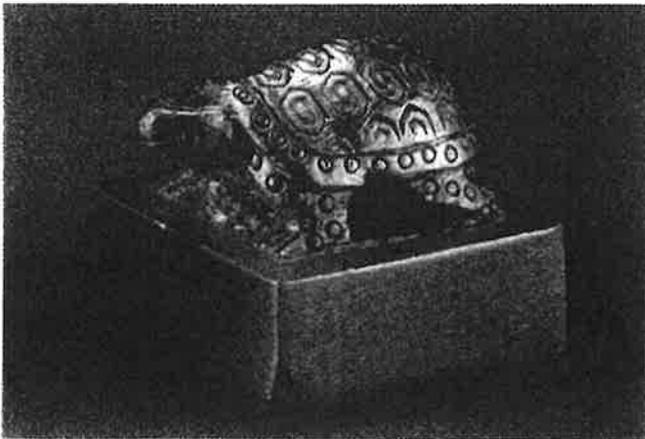
梶山 勝, 1986 「金印国家群」, のなかの「漢委奴國王」印 『Museum Kyushu』 第19号



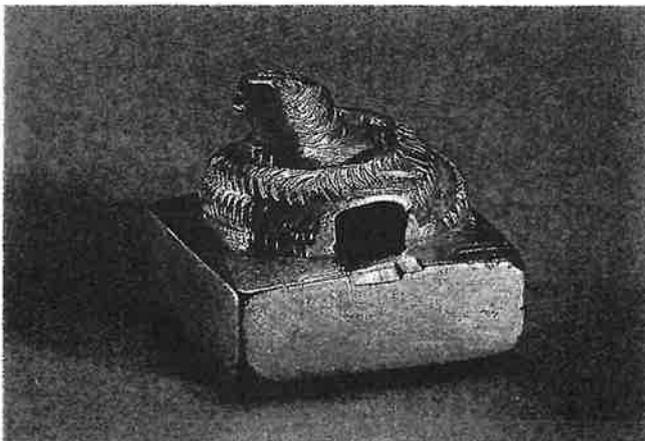
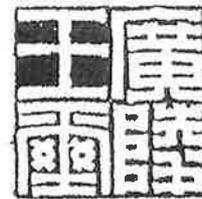
1 金印「滇王之印」紀元前109年  
一辺の長2.4cm (雲南省出土、中国歴史博物館)



2 金印「漢委奴國王」紀元57年  
一辺の長さ2.3cm (国宝・福岡市博物館)



参考 金印「廣陵王璽」(龜のつまみ) 紀元58年  
一辺の長さ2.3cm (江蘇省出土、南京博物院)



3 金印「蠻夷侯印」紀元265~316年  
一辺の長さ2.3cm (湖南省出土、平江県文物管理所)



蛇のつまみ(鈕)をもつ金印 3顆

九州国立博物館 誘致推進本部ほか、1994『金印、一海を渡る』

I 駝 鈕

表1「漢委奴国王」印の測定値

諸元		測定値
総高		2.236cm
鈕	高	1.312
	長	2.142
	幅	1.274
印面一辺の長さ	①	2.345cm
	②	2.354
	③	2.349
	④	2.341
	平均値	2.347
台高	①④	0.874cm
	③④	0.889
	①②	0.906
	②③	0.880
	平均値	0.887
質量	108.729g	
体積	6.062c <sup>3</sup>	
密度	17.94	
比重	17.94	

昭和41年(1966年)6月14日測定

民族名	印 銘	一 辺 長	材 質	出土地点(所蔵者)	文 献
匈奴	漢匈奴惡適尸逐王	2.43×2.43	銅 印	大谷353	
〃	漢匈奴率善長		〃		
烏丸	漢保塞烏丸率善長		〃		
胡	漢歸義胡長	2.1×2.1	〃	大谷357	
〃	漢率善胡長		〃		
夷	漢歸義夷阡長	2.2	〃	圓田湖城氏	
烏桓	新保塞桓煙犁邑率衆侯印		金 印		
鮮卑	魏鮮卑率善什長	2.28×2.25	銅 印	大谷361	
胡	魏率善胡什長	2.3×2.3 2.22×2.26	〃	〃 359 〃 360	
氐	魏率善氐邑長	2.3×2.3	〃		
〃	魏率善氐佰長	2.29×2.3	〃	〃 363	
俛	魏率善俛佰長	2.29×2.3	〃	〃 362	
屠各	魏屠各率善什長		〃		
烏丸	晋烏丸歸義侯	2.2	金 印	内蒙古涼城県出土	文物61-9
〃	晋烏丸歸義侯	2.25×2.21	銅 印	大谷366	
〃	晋烏丸率善什長		銅 印		「書道全集」2
烏丸	晋烏丸率善佰長	2.34×2.27	銅 印	大谷375	
鮮卑	晋鮮卑歸義侯	2.2	金 印	内蒙古涼城県	文物61-9
〃	晋鮮卑率善中郎将	2.1×2.15	銀 印	〃	〃
匈奴	晋匈奴率善佰長	2.3×2.3	晋 印	大谷370	
胡	晋率善胡什長	2.25×2.28	銅 印	大谷371	
〃	晋率善胡佰長	2.28×2.22 2.27×2.28	銅 印	大谷372 373	
氐	晋率善氐什長	2.21×2.21	銅 印	大谷374	
叟	晋歸義叟侯	2.3×2.31	銅 印	大谷367	

大谷353は「大谷大学古印図録」353をしめす。

II 蛇 鈕

民族名	印 銘	一 辺 長	材 質	出 土 地 点	文 献
滇	滇王之印		金 印	雲南省晋寧県石寨山	「発掘報告」
倭	漢委奴国王		金 印	黒田家蔵 東京国立博物館蔵	
蛮夷	魏蛮夷率善邑長		銅 印		本稿
〃	晋蛮夷率善邑長	2.25×2.2	銅 印	大谷368	「書道全集」2
〃	晋蛮夷率善佰長	2.4×2.3	銅 印	〃 369	
〃	蛮夷里長	2.1	銅 印	藤井有隣館	「書道全集」2

(岡崎 敬, 1968「漢委奴国王」金印の測定『史淵』第100号)

表4 中国前漢・王莽新・後漢の基準尺度

名 称	西 曆	銘 文	一尺の長	参 考
前漢元延銅尺	B. C. 11	「長安銅尺州枚第廿元延二年八月十八日造」	22.8 cm	故宮博物館 劉復氏の推定 「考古通訊」 1957-4
新莽(始建国)嘉量尺	A. D. 9	「龍在巳己…81字」(始建国元年)	23.08 〃	
新始建国銅撮	A. D. 9	「始建国元年正月癸酉朔日制」	23.7 〃	
新始建国大尺	A. D. 9	「始建国元年正月癸酉朔日制」	25.0 〃	
新始建国小尺	A. D. 9	「始建国元年造廿枚第六」	25.5 〃	
後漢建初銅尺	A. D. 81	「慮虎銅尺建初六年八月十五日造」	23.5 〃	

表5 中国漢代遺跡発見の漢尺

	出 土 地 点	性 質	材 料	一尺の長 長 さ	文 献	出土年
1	河南省洛陽市西工街	後漢・博墓	骨尺	23.0cm	考古 56-6	1959
2	山東省掖県	木槨墓	鑿刻花銅尺	23.6cm	文参 56-12	1956
3	〃 東平県王陵山	博墓	象牙尺	23.19cm	考古 66-4	1958
4	江蘇省儀征県石碑村	木槨墓	銅尺	23.3cm	考古 66-1	1965
5	安徽省合肥市西郊烏龜圩	後漢・博墓	銅尺	23.75cm	文参 56-2	1934
6	甘肅省蘭州・蘭工坪	博墓	骨尺	23.81cm	考通 56-5	1955
7	〃 玉門関、前漢長城 T. X 11			22.9cm	Serindia, vol. II p.680	
8	湖南省長沙市、劉家冲	後漢・博墓	銅尺	23.3cm	考古 59-12	1959
9	〃 〃 雷家嘴	後漢・博墓	銅尺	23.0cm	考通 58-2	1956
10	〃 〃 小林子	後漢・博墓	鳥獸銅尺	23.6cm	考通 58-12	1957

表3 中国近年発見の漢・魏・晋代の金・銀印

	地 名		印 銘	材質	鈕	一辺長	文 献	発見年
1	湖南省長沙、401号墓	前漢後半木槨墓	劉騭	銀印	龜鈕	1.9cm	「長沙発掘報告」	1951-52
2	山西省陽平関		朔寧王大后璽	金印	龜鈕	3.3cm	文参55-3	1954
3	山東省嶧県陶庄		平東大將軍章	金印	龜鈕	2.4cm	文物59-3	1958
4	湖南省長沙市東北郊		関中侯印	金印	龜鈕	2.4cm	文参58-3	1957
5	四川省成都市沙河水利渠		校尉之印章	銀印	龜鈕	2.4cm	文参57-12	1957
6	雲南省晉寧県石寨山		滇王之印	金印	蛇鈕	2.3~2.4cm	「発掘報告」	1957
7	内蒙古自治区涼城县 蛮漢山南部沙虎子溝		晉烏丸歸義侯	金印	駝鈕	2.2-9	文物61-9	1956
8	〃		晉鮮卑歸義侯	金印	駝鈕	2.2cm		
9	〃		晉鮮卑率善中郎将	銀印	駝鈕	2.1cm ~2.15cm		
10	甘肅省西和県		晉歸義羌侯	金印	羊鈕		文物64-6	1948頃
11	〃		晉歸義氐侯	金印	羊鈕		〃	〃

表1 蛇鈕印一覽

分類	印文	時代	素材	印面法量	所蔵者	文献	
1	?	商庫	秦	銅	2.3×1.5	上海博物館	方1989:36
2	IA	浙江都水	秦	銅	記載なし	上海博物館	孫2010:p.67, 羅1987:No.48拓本, 莊・茅1999-p.37-241
3	IA	旃郎尉丞	前漢	銅	2.4×2.4	故宮博物院	王・葉1990:pp.24・25, 羅1987:No.45
4	IA	白水弋丞	前漢	銅	2.5×2.5	故宮博物院	王・葉1990:pp.24・25・237, 羅1987:No.46
5	IA	代馬丞印	前漢	銅	2.5×2.5	故宮博物院	王・葉1990:pp.24・25・237, 葉1997:p.141-33, 羅1987No.51
6	IA	琅左塩丞(琅左丞)	前漢	銅	2.5×2.5	上海博物館	孫2010:p.78, 王・葉1990:p.20, 羅1987:No.52
7	IA	彭城丞印	前漢	銅	2.5×2.5	藤井有鄰館	大谷1974:pp.144-14, 王・葉199:pp.24・25, 羅1987:No.53
8	IA	新淦丞印	前漢	同	2.55×2.8	寧楽美術館	神田・田中1968-p.59-14・p.59
9	IA	字丞之印	前漢	銅	2.1×2.2	上海博物館	莊・茅1999-p.37-246, 羅1987:No.55
10	IA	左畧桃支	前漢	銀	2.5×2.5	天津芸術博物館	莊・茅1999-p.36-239, 羅1987:No.61
11	IA	?	前漢	銅			孫1999-p.34図59
12	IA	犍為太守章	前漢?	銅		寧楽美術館	金子2001
13	IA	趙臨	前漢	銅	1寸×5分	故宮博物院	羅1982:p.100-561, 金子2001
14	?	平陸丞印	前漢	銅			
15	?	離丞之印	前漢	銀	2.5×2.5	故宮博物院	羅1987:No.54
16	IB	漢東執封	前漢	銀	2.4×2.4	樂東県文化局	孫2010:p.90, 中国1993, 靑山2011:p.247
17	IC	演王之印	前漢	金	2.3×2.4	中国国家博物館	大谷1974:pp.144-145, 孫2010:p.75, 羅1987:No.1202, 莊・茅1999-p.63-417
18	IIA	勞呂執封	前漢	琥珀	2.3×2.3	広西壮族自治区博物館	金子2001:p.353(写真=吉開氏), 呉・袁旃1985:p.5
19	IIA	漢委奴國王	後漢	金	2.347	福岡市博物館	名古屋博・中日新聞社1989:p.71, 藤福順1987:No.1203
20	II B1	蛮夷里長	後漢	銅	22.6×22.1	藤井有鄰館	加藤1986:p.5・49, 大谷1974:pp.144-14
21	II B1	漢夷呂長	後漢	銅	22.9×23.0	寧楽美術館	加藤1986:p.9, 金子修一2001:p.359
22	II B1	漢匈奴姑塗黑蓋者	後漢	銅	2.3×2.3	故宮博物院	羅2010:p.118, 王・葉1990:pp.154・155
23	II B2	漢夷呂長	後漢	銅	2.17×2.21	寧楽美術館	加藤1986:p.10, 金子2001:p.354
24	II B2	漢夷呂長	後漢	銅	2.20×2.18	平倉	加藤1986:p.10
25	II B2	魏蛮夷率善呂長	魏	銅			大谷1974:pp.144-145, 加藤1986:p.61
26	II B2	魏蛮夷率善呂長	魏	銅	2.2×2.2	故宮博物院	吉開1999:p.10-7, 孫1999:p.132-図68
27	II B2	魏蛮夷率善呂長	魏				加藤1986:p.61
28	II B2	魏蛮夷率善什長	魏	銅		上海博物館	孫2010:p.126
29	?	晋蛮夷率善什長	晋	銅			顧氏『集古印譜』吉林版p.86-7, 甘・徐2000-p.21-下中
30	II B2	晋蛮夷率善什長	晋	銅	2.27×2.27	藤井有鄰館	大谷1974:pp.144-145, 加藤1986:p.43
31	II B2	晋蛮夷率善什長	晋	銅		上海博物館	孫1999:p.131図66
32	II B2	晋蛮夷率善佰長	晋	銅	2.4×2.3	大谷大学図書館	竹田1964:369, 加藤1986:pp.56-112・p.121
33	II B2	晋蛮夷率善呂長	晋	銅		大谷大学図書館	竹田1964:368, 加藤1986:p.68
34	II C	蛮夷侯印	晋	金	2.3×2.3	湖南省平江県文物管理所	孫2010:p.141, 賀2006, 莊・茅1999-p.124-852
35	II C	蛮夷呂長	吳/蜀	銅		故宮博物院	葉1997:p.141, 羅1987:No.1505
36	II C	親晋王印	?	銅		故宮博物院	葉1997:p.141, 羅1987:No.2054
37	?	樊興侯印	晋	銅		甘肅省天水市文物館	金子2001:p.367
38	III	涂渚之印	?	銅		上海博物館	金子2001:p.359
39	?	單尉	後漢	銅		上海博物館	羅1987:No.1063
40	II C?	行(朱文印)	?	銅	1.35×1.6	大谷大学図書館	竹田1964:158(写真あり)

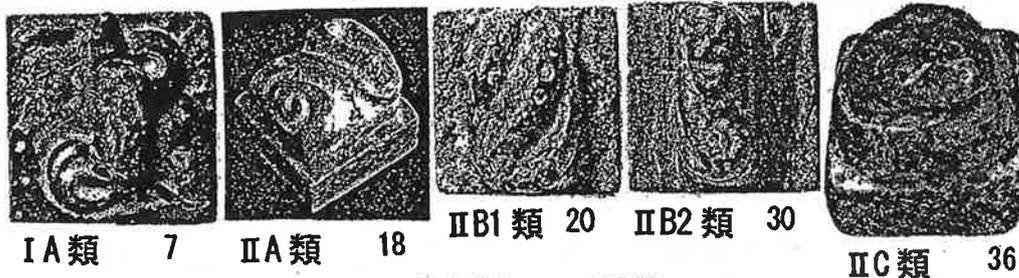
表2 蛇鈕の類型分類基準

分類階層			分類基準: 階層1=印台と鈕の接合状態, 階層2=蛇体の上面観, 階層3=蛇体の細部形態。
1	2	3	
I			鈕の蛇体が独立して印台の上ののるもの。
	A		蛇体が直線的なもの。幅狭い鼻鈕の前後に頭と尾をつくる。頭と尾はΩ形をなす場合がある。
	B		蛇体がS字形をなすもの。鼻鈕の形態から逸脱する。
	C		蛇体が前後に(頭から尾にかけて)螺旋形をなすもの。
II			鈕の蛇体が印台と面的に付着するもの。
	A		蛇体が塊状を呈し、頭と尾が、斜めに伸びる蛇体の前後で螺旋形をなすもの。
	B		蛇体が前後に長く、左右両側が直線的なもの。
		1	頭部や尾部を長軸線の左や右につくるもの。
		2	頭部を長軸線上につくるもの。
	C		蛇体の上面観が丸い渦形をなすもの。頭部は鈕の上方に延びる。

II A類中の19とII B類はすべて駝鈕の再加工品と判断できる。

表3 各類型の時期別例数

類型	秦	前漢	新	後漢	魏	晋
I	A	1	11			
	B		1			
	C		1			
II	A		1	1		
	B1			3		
	B2			2	4	4
C					1	2

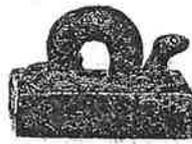


蛇鈕類型の上面観

I A類



2 浙江都水：銅/秦



3 旃郎廚丞：銅/前漢



4 白水七丞：銅/前漢



5 代馬丞印：銅/前漢



6 琅左塩丞：銅/前漢

I B類

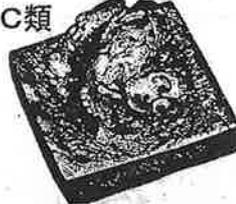


7 彭城丞印：銅/前漢



16 朱盧執判：銀/前漢

I C類



17 漢王之印：金/前漢



(参考)

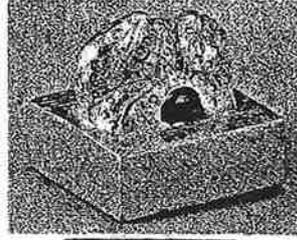


\*文帝行璽：金/前漢

II A類



18 勞邑執判：琥珀/前漢



19 漢委奴國王：金/後漢

II B1類



22 漢匈奴姑塗黑臺者：銅/後漢



21 漢叟邑長：銅/後漢



20

II B2類



23 漢夷邑長：銅/後漢



24 漢夷邑長：銅/後漢



30 晉蛮夷率善佰長：銅/晉



32 晉蛮夷率善佰長：銅/晉



20 蛮夷里長：銅/後漢



II C類



34 蛮夷侯印：金/晉



26 魏蛮夷率善邑長：銅/魏



25 魏蛮夷率善邑長：銅/魏



30 晉蛮夷率善仟長：銅/晉

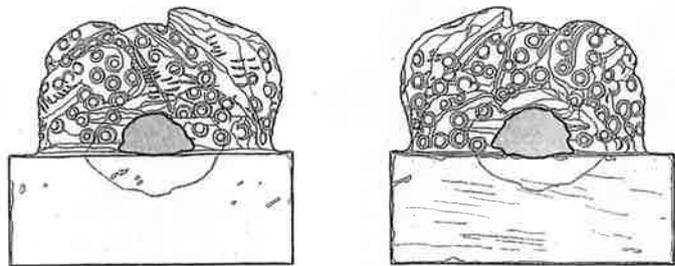


28 魏蛮夷率善仟長：銅/魏

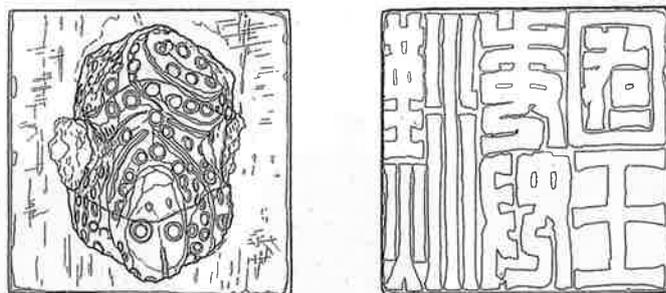
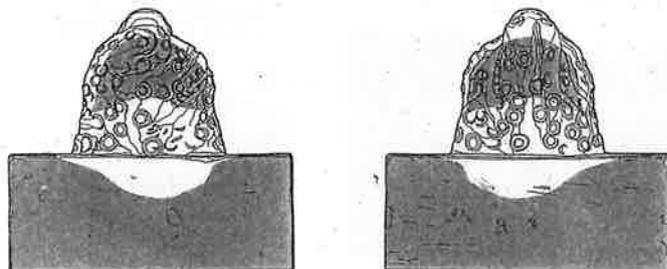


蛇鈕印各類型の代表例 (数字=表1)

石川日出志, 2014 「漢委奴國王」金印と漢～魏・晋代の東夷古印」  
 第5回高麗大校・明治大学国際学術会議「文学と歴史を越えしめた東アジア」



0 2cm



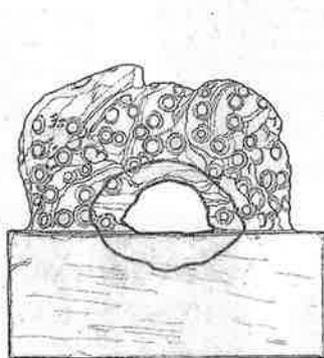
本田浩三郎、二〇一六「国史金印「漢委奴国王」の鈕孔に関する視察」

福岡市博物館 研究紀要

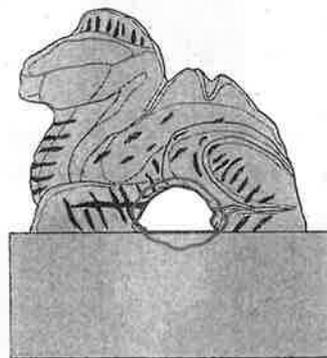
第25号

国宝「金印 漢委奴国王」鈕孔内形状模式図

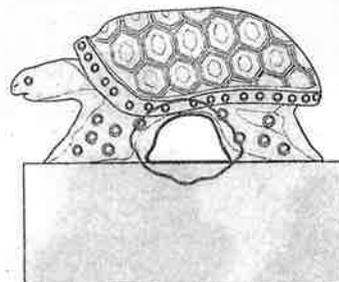
鈕孔内の空洞は中子の形状を転写したものと考えられるが、不定形を呈している



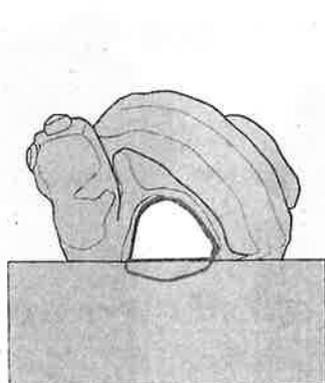
漢委奴国王 蛇鈕金印 AD.57



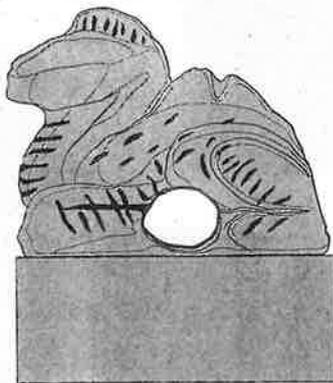
漢盧水佰長 駱駝鈕銅印 後漢代



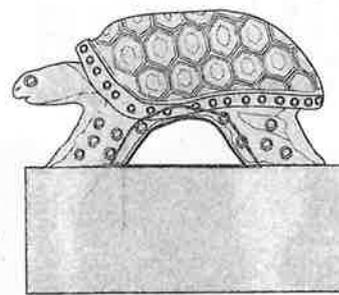
広陵王璽 亀鈕金印 AD.58



滇王之印 蛇鈕金印 BC.109



駱駝鈕銅印

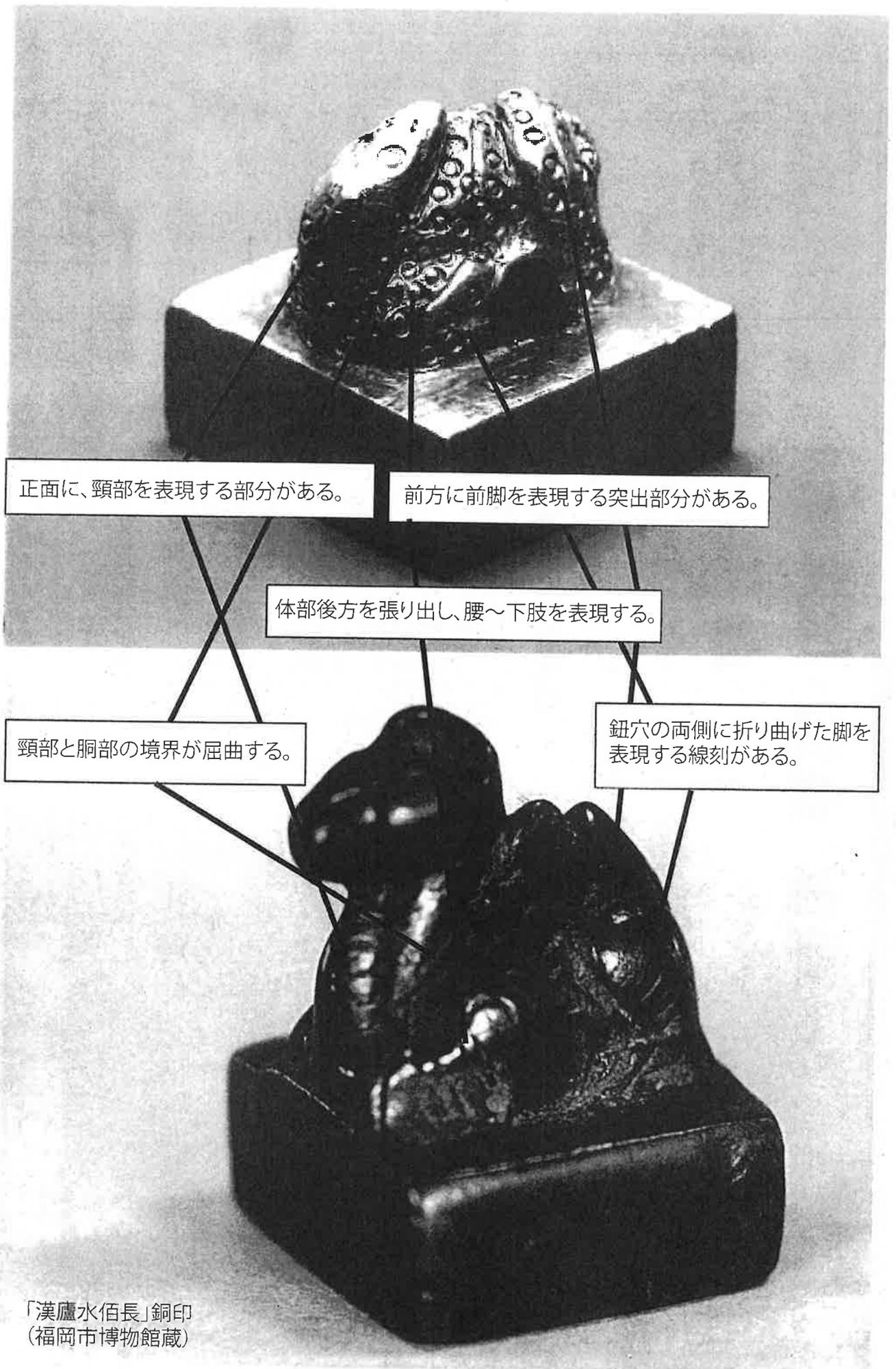


関中侯印 亀鈕金印 魏

各鈕形に伴う鈕孔と内部形状の比較模式図（縮尺は不同）

駱駝鈕印は館蔵資料を基に図化を行った。滇王之印は館蔵の複製品を図化している。亀鈕印については概略模式図を作成の上、複数の画像を参考に鈕孔形状と内部形状について図化を行っているが、詳細な計測値が公表されていないため図面としては大まかな比較図であることを了承いただきたい

大塚紀直、二〇一六「金印の蛇鈕は駱駝だったのか」駱鈕改作説にみる金印の歴史的意義」第10回金印シンポジウムレジュメ



正面に、頸部を表現する部分がある。

前方に前脚を表現する突出部分がある。

体部後方を張り出し、腰～下肢を表現する。

頸部と胸部の境界が屈曲する。

鈕穴の両側に折り曲げた脚を表現する線刻がある。

「漢廬水佰長」銅印  
(福岡市博物館蔵)

「漢委奴国王」金印の蛇鈕と駱鈕の形状比較

